

サルは木から落ちない

岩 本 光 雄

ある意味で、人間の手の構造はひじょうに原始的なものである。何億年にもわたる動物の進化の歴史の中で、五本の指をもつ手はひじょうに古い伝統をもっているからである。現在すんでいゝるさまざまな動物の中には、五本指を典型的な形でもっている動物はむしろ少ない。五本の指をもつ古典的な構造をした手は、サル類以外の動物では、進化の過程で大なり小なり変形してきてしまっているのである。

よく、サルからヒトへといわれる。私どもの手も、サルからゆずり受けたものだからこそ、今のような形をしている。サルからヒトへに対応する生活の歴史は、一口にいえば、樹上から地上へである。サルが原始的な五本指の手を保存しつづけたのは、五本指の手のままの方が樹上生活に便利だったからである。というより、五本指の、つかめる手を利用して樹上生活への道に入ったということもできよう。五本指の手の活用に成功したのである。

手のひらを見ると、指の部分も含めて、皮膚の全面に細い隆起

線——皮膚隆線——がぎっしりつまって並んでいる。その線が指先で作っている模様が、有名な指紋である。同じような皮膚隆線は、いわゆる下等なサルの手のひらにも部分的に認められるし、高等なサルの場合には手のひらの全面に発達している。チンパンジーなどの類人猿の場合には、指紋の模様そのものが人間のにかなりよく似ている。

私どもと同じような形の、つまり長い指を備えたサルの手は、樹上で枝をつかむのに適しているが、そのつかむ動作を機敏にやるのに、皮膚隆線が実に大きな役目を果している。皮膚隆線は触觉を鋭敏に感ずる構造をもち、豊富な神経を内蔵しているから、他の木や枝へ飛び移った時に、その表面に手がさわった瞬間をキヤッチするのに便利にできている。かくてサルは、めったに木から落ちないですんでいるし、木から落ちるサルがことわざにもなりえているのである。

もちろん、サルの手は枝をつかむだけに利用されているのでは

ない。いわゆる前足として、歩くのにも使われているし、食べ物をつかんだり、毛づくろいをするのにも使う。

しかし人間の場合は、手は姿勢の保持や移動からは大きく解放され、本来の意味の手の役割を果たすようになっていく。しかも人間の場合、知脳の発達が手の手としての役割をひじょうに高級なものにしている。このあたりは特にくわしく説明するまでもないこととして、要は知脳をつかさどる脳が考え、構造上、器用な手がこれを実行するという関係になっている。

ここまででは一種の順当な話である。しかしこれから先は、筆者の科学的スペキュレーションである。それは、脳が命令者で手が実行者だとばかり、単純に考えなくてもいい面があるということを書きたいのである。

たとえば、特に脳からのはっきりした命令がないままに手が働いていることはよくある。それを無意味な動作だとして、無視するならまだしも、抑えつけようとするのはどうかなと思わせられることがある。

具体的にいえば、何とはなしに指先や手のひらで机の上をこすっていたり、ひたいをさすってみたり、あるいは指先同士をこすってみたりする動作。よく考えてみると、軽くストレスを解消している効果を果している時があるようにも思えるし、そう重大な

ことではないが、自分の心の機微にかかわるちょっとしたことについて、何かいい知恵はないかと自分をうながしている動作に思えるようなこともある。

子どもの場合にはもつと直接的に愛情といったものにかかわっている場合がある。毛布を手でまさぐってはいくらでもない子ども。それは、ぬいぐるみでもありうるし、布切れでもありうる。子ザルを親から離して育てると、いつもタオルを手にしていないと不安がったりすることは、決して珍しくはない。

人間もこうして、まだ動物なのである。特に実際の目的もなく、指先や手でものをこすってみたり、さすってみたり、握っていたりするのは、悪いくせだから止めよう、止めさせようと考えるのは、無駄というものだろう。強行すればストレスをこうじさせることになりかねないと思う。握ってはいなくて、あるいはつかまっていなくてはならぬことが、サルでは実に多い。母親にかまって育ち、大きくなれば枝につかまって安眠する。人間にも、なお、それに似た何かが手の感触をめぐって存在するのだろう。精神活動の豊かな人間の場合には、その延長として、手の触覚から発して、脳を活性づかせる効果も生じているのだろうという気がしている。

(京都大学霊長類研究所)